

# 本論



# 第1章 江戸川乱歩の「探偵小説」 —ジャンル論からのアプローチ—

## 第1節 「探偵小説」について

### 1. 「探偵小説」について

「探偵小説」は今のミステリー(mystery)や推理小説とは基本的に同じジャンルである。福田陸太郎・村松定孝共著『新編 文学用語辞典』では、「探偵小説」の解釈について次のように解説している。

推理と思索とを基調とした小説。いわゆる探偵小説（読者をさそって探偵上の問題を解決させる小説）もこれに含ませることにしたい、と木々高太郎は提唱したが、推理小説の概念がはじめてはっきりした主張として出されたのは、昭和21年ごろ木々高太郎によってであった。（中略）推理小説は、戦後「偵」の字が漢字制限で削られたため、推理小説という呼称に代わって出てきた日本独自の呼び名である。（中略）日本で以前使っていた「探偵小説」という呼称は、「探偵的」な小説のほかにも、犯罪小説、怪奇小説、恐怖小説、幻想小説、空想科学小説、異境探険小説などを含み幅広く解釈されていたので、純粋な意味での「探偵」の小説を「本格探偵小説」として区別したこともある。欧米でも同様のことがあり、たとえば「ミステリー」と言えば、謎解きの純探偵小説（ピュア・ディテクティブ・ストーリー）のほかにも、ハードボイルド、心理サスペンス、スパイ・スリラー、犯罪小説、怪奇小説なども含む<sup>1</sup>。

以上の引用が示すように、日本ではもともと「探偵小説」という呼称を使っていたが、戦時下規制のため、木々高太郎が代わりに「推理小説」という呼称を提唱し、昭和21(1946)年の後に広く使われるようになった。「探偵小説」は謎解きのストーリーはもちろん、広義的には怪奇小説、異境探険小説なども含む。そして欧米の「ミステリー」というジャンルは「探偵小説」と同じくその内容

<sup>1</sup> 福田陸太郎・村松定孝『新編 文学用語辞典』、こびあん書房、1987年、pp.152-153。

は多彩で、心理サスペンス、怪奇小説なども含む。要するに、「探偵小説」、推理小説、ミステリーなどの用語があるものの、その本質的な差異はないのである。

「探偵小説」という文学ジャンルの誕生について、廣野由美子は『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』において、ミステリーと文学との関連性について、次のように説明している。

本来、探偵小説・推理小説(detective story)が特定の文学ジャンルの名称であるのに対して、ミステリー(mystery)はジャンル名(mystery story)であるのみならず、「秘密・謎・不可解なもの・神秘」といった広義の意味を含む一般名詞でもある。(中略)

フォースターがストーリーとの比較をとおしてプロットを定義づけるとき、ミステリーの特徴が明らかになってくる。つまり、物語の時の流れを止めるもの、読者に「なぜ?」と問わせる要素がミステリーであるとするならば、あらゆる文学にはミステリーが含まれているといっても過言ではない<sup>2</sup>。

廣野の論点を整理して要約すると、ミステリーはジャンル名だけでなく、秘密・謎などという意味合いもある。そしてプロットを解読するに当って、読者の記憶力と知性が求められており、つまり謎→推理→解明という過程がミステリーにおけるプロットである。そして廣野はさらに「この普遍的な文学的要素としての「ミステリー」を特化し、その部分を高度に発達させることによって派生してきたジャンルが、ミステリー＝探偵小説と言えるだろう<sup>3</sup>」と「探偵小説」の誕生について説明し、そして「探偵小説」の定義について、以下のように述べている。

「ミステリー」とは、謎解きに対する読者の好奇心と理知的欲求を掻き立てる牽引力を秘めた要素とでも言い換えておいたほうがよいだろう。探偵小説は、まさにこの牽引効果を集中的にねらったジャンルであるため、

<sup>2</sup> 廣野由美子『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』、岩波書店、2009年、pp.2-5。

<sup>3</sup> 注2前掲書参照、p.5。

いきおいそこには知的な遊びへと向かう方向性が含まれている<sup>4</sup>。

以上の引用を見ると、読者が自分の知性をもとに、謎解きの過程を楽しむのが「探偵小説」の基調である。しかし「探偵小説」は単純な謎解きの遊戯だけではない。江戸川乱歩は「探偵小説」を「ゲーム探偵小説<sup>5</sup>」「非ゲーム探偵小説」「倒叙探偵小説」という三つの形式に区分し<sup>6</sup>、そして「非ゲーム探偵小説」という形式の特徴について次のように解釈している。

推理の資料となるデータ(手掛り)殊に犯人を確定するに足る重要なデータが、小説の半ばごろまでに提出されないで、ごく終りの方になってはじめて出る為に、出たかと思うとすぐ解決になり、挑戦の面白さを味う余裕のないもの、又、探偵をわざと凡人にする為に、データの思い違いなどが多く、読者は提出されたデータを不動のものとして信用し得ず、随ってゲーム興味の起り得ないもので、この型の探偵小説は「ゲーム」「挑戦」「フェア・プレイ」などを殆んど問題にしていけないのである<sup>7</sup>。

以上の「非ゲーム探偵小説」の特徴を見ると、謎解きのデータの解析や、作中の探偵役と謎解きを競うゲーム的要素などはこの形式のポイントではない。逆に乱歩が言うように、「この型の作品は、一概には云えないけれども、トリックの独創よりはプロットの構成の面白さで優れたものが多い<sup>8</sup>」と物語の構成に重点が置かれているのが特徴である。そして「倒叙探偵小説」という形式について、乱歩によると、正面から犯人の心理や犯罪動機、トリックなどを詳しく描き、そして探偵の機智によって徐々にそのトリックが解明されていく過程が「倒叙探偵小説」の特徴である<sup>9</sup>。

以上の乱歩が提出する三つの形式はそれぞれ主旨が異なっているものの、共通する点として、「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的

<sup>4</sup> 注2 前掲書参照、pp.5-6。

<sup>5</sup> 謎を解くべき多くのデータが明示され、それに基づいて探偵の推理が進められるので、読者は作中の探偵と謎解きを競う楽しみを味わうことができる。これが乱歩の言う「ゲーム探偵小説」である。(江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』、p.28より)

<sup>6</sup> 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』、光文社、2003年、pp.28-37。

<sup>7</sup> 注6 前掲書参照、pp.34-35。

<sup>8</sup> 注6 前掲書参照、p.35。

<sup>9</sup> 注6 前掲書参照、p.41。

に、徐々に解かれて行く径路の面白さを主眼とする文学である<sup>10</sup>」という乱歩自身の定義があるように、謎解きの面白さが「探偵小説」の本質であり、そして不可欠な要素でもある。

## 2. 日本近代「探偵小説」の源流

「探偵小説」の研究者である中島河太郎は『推理小説展望』で、日本近世「探偵小説」の源流について次のように説明している。

わが国の近世文学の中に、いわゆる比事物や用心記物、政談物があって、雪冤的興味と犯罪要素を扱ったものがあるが、現在の推理小説の概念からはものたらない<sup>11</sup>。

以上の引用に示すように、犯罪要素を扱った作品が日本近世文学にすでに見られ、例えば江戸時代に中国から伝来した公案小説がそうである。北村薫は『謎のギャラリー—名作博本館—』一書において、『竜図公案』と『棠陰比事』を例として挙げている<sup>12</sup>。『竜図公案』はその中国で有名な判事、宋の包拯を主人公とした裁判小説集であり、そして『棠陰比事』については、岩波文庫版のカバーによると、以下のような内容である。

『棠陰比事』とは「名裁判くらべ」というほどの意味で、この本には中国古来のすぐれた判決の実例が2つずつ対比するかたちで144例収められている。江戸時代に伝来して圧倒的な人気を博し、これにならって「板倉政要」や「大岡政談」、西鶴の「本朝桜陰比事」などの裁判ものがかかれた<sup>13</sup>。

中国の公案小説あるいは江戸時代の比事物などには犯罪と裁判の要素が見られるが、中島はこれらの作品を「現在の推理小説の概念からはものたらない」と結論付けている。また、乱歩は公案小説、裁判小説について次のように論じている。

<sup>10</sup> 注6前掲書参照、p.21。

<sup>11</sup> 中島河太郎『推理小説展望』、双葉社、1995年、p.56。

<sup>12</sup> 北村薫『謎のギャラリー—名作博本館—』、新潮社、2002年、pp.56-58。

<sup>13</sup> 桂万栄編 駒田信二訳『棠陰比事』、岩波書店、1985年、カバー。

中国の公案ものや日本の江戸時代の裁判小説には、神託、夢判断、ト占などによって犯人を探し出す話が屢々出て来るが、こういう非論理的な探偵法は、近代の探偵小説に於ては許されないのである<sup>14</sup>。

乱歩の論点によると、公案小説、裁判小説には犯罪の要素あるいは事件解決の過程と裁判があるが、「神託」「ト占」など不可解な現象が多く、「探偵小説」の論理性とかけ離れているので、近代の「探偵小説」のような論理性に欠けている。しかし論理性はないに等しいものの公案小説、裁判小説における謎解きの要素はやはり後世の「探偵小説」の創作に影響を与えるものがあつた。

このように、謎解きの要素などは近世（江戸時代）文学の裁判物に見い出すことができるが、近代の「探偵小説」に深く影響を与えたのは、むしろ欧米文学である。明治時代以来、大量な欧米文化が日本に伝入り、欧米文学も翻訳を通して日本に紹介された。欧米文学が「探偵小説」に与えた影響について、中島河太郎は『推理小説展望』で、次のように説明している。

明治初期の新聞の続きものは新聞雑誌を潤色したもので、犯罪を素材としたものが多く、毒婦兇漢の伝記を仕立てることが流行した。こういう伝統的なものに対して、外国の珍事異聞の中で、探偵趣味を有するものの紹介がなされなかったわけではない。

特筆すべきは翻訳推理小説の元祖といわれる「楊牙児奇獄」で、明治十年（一八七七）九月、「花月新誌」に発表された。これは神田孝平が文久元年ごろ（一八六一）、オランダの書物から抄訳したもので、旅館の夫婦が行商人を殺したことに気づかれたので大学生を殺し犯跡を隠していたが、大学生の残した演劇脚本から発覚するという筋である。その他十四年の高橋健三訳の「情況証拠誤判録」や、二十一年の千原伊之吉訳の「摘陰発微・奇獄」は、犯罪実話を集録したものであるが、まだ推理小説への関心をそそるには至らなかった<sup>15</sup>。

以上の引用が示すように、明治時代に、中国の公案小説だけでなく、欧米の

<sup>14</sup> 注 6 前掲書参照、p.24。

<sup>15</sup> 注 11 前掲書参照、pp.56-57。

犯罪実話の記録集も日本に紹介された。特に上掲の一文で取り上げた蘭学者の神田孝平訳の「楊牙児奇獄」には、乱歩が提出した「探偵小説」の定義「主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く径路の面白さ」が見られるため、中島は「楊牙児奇獄」を「翻訳推理小説の元祖」と称している。「楊牙児奇獄」のほかに、第三回大衆小説研究賞を受賞した作品「黒岩涙香-探偵小説の元祖-」の作者・伊藤秀雄は『昭和の探偵小説 昭和元年-二十年』において、黒岩涙香の「探偵小説」「無惨」(『小説叢』、明治22(1889)年9月)を日本の「探偵小説」の嚆矢とし<sup>16</sup>、この作品は高橋訳の「情況証拠誤判録」の第一判例を題材としている。

以上に見てきたように、欧米犯罪実話集の翻訳本は近世文学の比事物、公案小説と比べて、現実性が比較的高いと言えよう。日本の「探偵小説」の嚆矢とされる「無惨」も欧米犯罪実話集をもとに創作された作品である。この点から見れば、明治時代から伝入された欧米犯罪実話集の翻訳本は日本の「探偵小説」創作の最初のモデルということがわかる。

### 3. 日本近代「探偵小説」の展開

日本近代「探偵小説」の発端は前の小節にまとめたように、欧米の翻訳文学からはじまったと言える。そして欧米「探偵小説」の起源について、中島河太郎は「ポーの「モルグ街の殺人事件」を当てるのが通説になっている<sup>17</sup>」と述べている。その「モルグ街の殺人事件」(*The Murders in the Rue Morgue*)はアメリカのエドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)が1841年に発表した作品である。この作品が公表されてから、「探偵小説」というジャンルが欧米から世界に広がり、その風潮も日本へ流れてきた。

明治時代、欧米の「探偵小説」の翻訳が次々と日本の読書界に発表された。中島は当時の「探偵小説」の翻訳の発展について、次のように述べている。

ところが明治二十年代は推理小説全盛時代で、読書界はまったく推理小説に席捲されたといつてよい。黒岩涙香が明治二十年(一八八七)〔「緋色の研究」と同年〕、「今日新聞」に掲げた「法庭之美人」がその先鞭をつけたもので、二十五、六年までに推理小説三十数篇を翻訳している。(中略)

<sup>16</sup> 伊藤秀雄『昭和の探偵小説 昭和元年-二十年』三一書房、1993年、p.11。

<sup>17</sup> 注11前掲書参照、p.9。

涙香の紹介ぶりは自由訳ともいうべきもので、筋は多く原作のままであったが、一行一行の描写に涙香独特の味をつけるという行き方で、むしろそこに涙香物の魅力があった<sup>18</sup>。

欧米の「探偵小説」の翻訳を日本全国に広げた人物は、以上の引用に言及された黒岩涙香である。日本の推理小説の父と呼ばれる江戸川乱歩も涙香訳の「探偵小説」の大ファンであった。

このように翻訳「探偵小説」が明治20年代から大正初期にかけて興隆し、欧米の「探偵小説」の翻訳の全盛期を示している。これらの翻訳が日本の「探偵小説」の啓蒙となるのは言うまでもないが、日本の純文学の作家、例えば佐藤春夫、芥川龍之介、谷崎潤一郎などが発表した作品も後の「探偵小説」の作家に深く影響を与えた。

そして日本の「探偵小説」の発展において言及せねばならないのは、大正9(1920)年に博文館から創刊された『新青年』という雑誌である。伊藤秀雄の『昭和の探偵小説 昭和元年—二十年』では、『新青年』の創刊について次のように説明している。

森下雨村は師弟関係にあった編集局長の長谷川天溪に招かれて大正八年博文館に入社し「冒険世界」の編集をまかされた。が、第一次世界大戦後で、米価の暴騰、労働運動など、激変する内外情勢の中で、将来性のない行き詰まった雑誌と思った。一年ほど辛抱して「新青年」が発刊された。題名も天下り的で都会の青年より、地方青年向けの堅実な内容と規定されて不満だった。が、読者を引き付ける読物として翻訳探偵小説を考えついた。これが若い読者層の支持を得た。創作探偵小説の懸賞募集もはじめた。幸い英文学の先輩の長谷川天溪、馬場孤蝶、小酒井不木、井上十吉などのよき後援者を得て発展して行った<sup>19</sup>。

以上の引用が示すように、『新青年』はもともと「探偵小説」の内容と関係がなかったが、読者を惹き付けるために考えた翻訳「探偵小説」が最も人気があったので、次第に「探偵小説」を主体とする編集方針に変わった。その後、投稿

---

<sup>18</sup> 注11 前掲書参照、p.57。

<sup>19</sup> 注16 前掲書参照、p.23。



の翻訳作家や懸賞作家が増え、そしてよき後援者の尽力により、多くの「探偵小説」作家を世に送り出すことに成功した。例えば江戸川乱歩のデビュー作「二銭銅貨」は森下雨村と小酒井不木の賞識を得たために、めでたく日本の「探偵小説」界にデビューを果たしたのである。

『新青年』に作品が掲載された「探偵小説」作家は江戸川乱歩のほかに、次のような作家たちがいる。

乱歩以前の作家として、横溝正史、水谷準、角田喜久雄等があり、乱歩につづく作家に甲賀三郎、小酒井不木、大下宇陀児、山下利三郎、城昌幸、久山秀子、羽志主水、渡辺温、平林初之輔、川田功、山本禾太郎、地味井平造らが登場した<sup>20</sup>。

以上の作家の中で、最も有名なのは横溝正史（大正10年に「恐ろしき四月馬鹿」一作で創作募集入選）と江戸川乱歩（大正12年に「二銭銅貨」でデビュー）であるが、ほかにはじめて「本格<sup>21</sup>」と「変格<sup>22</sup>」という用語を用いて、「探偵小説」を分類した甲賀三郎などが有名である。多くの研究理論を発表した甲賀の文才について、甲賀三郎に師事した九鬼紫郎（本名は森本澹）は「重厚な本格作風<sup>23</sup>」と高く評価している。

以上に見てきたように、『新青年』は多くの新人作家を育て、その影響は大きく、日本の「探偵小説」発展史を語るに欠かせない存在であると言える。

---

<sup>20</sup> 注16前掲書参照、pp.23-24。

<sup>21</sup> 甲賀三郎が提出する「探偵小説」の一類別である。謎解きの論理的興味を主眼とするものを本格と称する。（大久保典夫『大衆化社会の作家と作品』、p.86より）

<sup>22</sup> 甲賀三郎が提出する「探偵小説」の一類別である。怪奇・幻想的な要素を持っているものを変格と称する。（大久保典夫『大衆化社会の作家と作品』、p.86より）

<sup>23</sup> 九鬼紫郎『探偵小説百科』、金園社、1975年、p.63。